

Title	探勝會の記
Author(s)	白井,文渓;桑原,直子;仲田,應弘
Citation	懐徳. 1933, 11, p. 117-126
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88900
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

勝 9

Ш 0

夜

つるして寝る、寢床の變りたると風もなく寢つ 白

井

文

溪

行者の鈴の音が續く。 かれず。月出づ更けゆくまゝ、 かごは大峰登山

野ケーブルを下車、今夜の宿坊竹林院へいそぐ。 七月一日日くれ前懷德堂々友會員同人と共に吉

夏山や日の暮れせまり曇りくる

短夜やまた水音を池の鯉

短夜や梟の聲を夢かさも

雨宿りを路傍の家に乞ふ

夕立に坂のしぶきや山の町

途上沛然として山雨來る、己むなくしばしの

吉野朝時代後醍醐帝を奉迎せし吉水宗信法印の 明くれば二日早朝より夏山めぐり、

阪路の傍、

墓に参拜す。

入る、庭上老松槎枒さして山あり池あり、林泉

くれの薄明りに怪鳥しきりに飛

俄雨晴れて急坂を登る、數町にして竹林院に

雲井櫻の朽木を左手に仰ぎ、子守神社へ賽す、 夏艸をたヾ踏みかねて弔ひぬ

豊臣秀賴の再建せるものなりと。

炎天を石楠花ひさぐ小店哉

夜

芳 山 三方開け放つた大座敷の中程に二張の大蟵を

くつろぐや|雨後のしめりに茂る宿

び交ふ梟也。 の風光また住。

 \mathcal{O} る尙へらき蓊鬱たる杉の木立の間道を辿る。

木 山の背に著装の繁りや木下闇 下 深 み人 聲 谺 して

如意輪寺に參詣、 後醍醐帝陵を拜す、

手の汗や静かに御陵伏し拜む

竹林院に戻りて晝食。少憩の後午後三時出發、

先づ後醍醐帝行宮吉水神社へ詣づ。

凉しさを花なき宮に思ひよす

藏王堂にて

夏山や御堂に登る

宮に参詣、新らしき御社神々しさ限りなし。 歸途吉野ケー ッ ıν 前より自動 下 駄 O) 音 車に乗じ吉野

Ailyl

日盛りや参道長き小砂利道

午後八時頃阿倍野驛着。バスにゆられて歸る。

大阪の町は灯りて門すいみ

川 寺

弘

詣

て

桑

原

直

子

寺に着きて見れば、庫裡客殿新に建かわり、

今年六月十一日、大阪史談會々員の弘川寺に詣

でらるゝ數に加りて、その朝八時阿倍野橋より

と廣やかに且づ其の清々しさいはん方なし**、**此

天皇の御代勅願寺となり、金堂講堂資塔鐘樓な の寺は天智天皇の四年、 役の小角草創し、天武

電車にのる、會員は二十人ばがりなり、 にて下り、 それより自働車を走らす。 宮田林

ご建立せられしが、寬政二年兵火のため堂宇燒

ざにて、

終焉の地なる和泉國鋸尾村の北村家に

失せるなりと、今日は特に我等一行の爲にとて、

息 後鳥羽天皇勅額、 弘川寺綠起、 空海筆般若心經、西行法師消 正親町天皇宸筆、 一乘院尊賞

同 法親王書、 似雲筆西行 法師古墳記、 同 年 並 草、

る

13

おの

n

ならべ 阿彌 おか 陀像及硯なご、 る シを、 皆うちよりて見る、 數多き寳物を取 出 おの L か H

は先づ古墳記を見て n

à. たつね來てよむそ嬉しき幾歲か心にかけし る塚のふみ

苔のむす年ふる塚を尋ね來てみるもうれし や水くきのあ

石山のくしき佛 Ø 御ちかひは ひろ川寺にあ

年並草は が實永七年より四十年の間の旅の記、 はれにけ 一部十冊にて二部 h あ b i n は似 和歌な 雲法

師

弘

)]]

寺

韻

7

移られしのち、 し和歌の浦の年なみ草は藻くつはか りと**、**奥に書添へて「かきつめて見るもか 清書して寺に納めら りを」こあ n しものな ひな

< め られし年なみ草を h か ^ し見るひまなきそ恨 めしきか きつ

もくつなりども」 「かきてまし硯の どあ 海のこをひかた甲斐なき瀉 Ś 1 お の

また「とをひかた」と名づくる硯あり、

その袋

の 1:

寺證文とい ふもの見出づい 享保十五 年 -j-涥 四

浦はの玉とか

くやく

とほひかたかき殘されしことの葉は和歌の

庵さあり、これなん似雲法師の奥のお れし時懐にせられしものなり、 いはれていとめづらし、 しまに行

二九

度うか

か

いまだ見をはらねざも、ひるげせんとうながさ

れければ、携へ行ける包ひらきぬ、住職の心づ

庭のさつきの花のさかりはやゝすぎたれごも、 くしの餅甘しさて、皆舌つゝみをうつ、見渡す

3 どうるはしさに、

弘川の青葉のか けの御佛になつの手向と匂

ふ丹つゝ

り行けば、 同うちつれ立て、御墓へと石のきざはしのぼ 右手の堂に薬師菩薩安置しあり、左

數十歩のぼりしてころ、西南見渡しよき平地に、 手の空地に金堂再建の木標あり、その上の坂路

屝 τ 西行法師の木像を安置せるさゝやかなる堂あり の物語 ひらき供物さいけあり、 りなごありて、 住職より木像につき 同ふしをがむ、

い

此

あたりや庵のありしならんかと思ひて、

西のそらなかめし昔おもふかなかたむく 月

それより新しく造られし坂をのぼりつゝ、百合

の花を見て、 いさ折て手向まつらむわけのほる袂に匂ふ

Щ ゆりのはな

數百步の上はひろ くてして平らなる地なり。

ひらかれて、見渡しいとよきところとなれ いにし年生茂りつるうはらなざも、今は皆きり

のは東の方にあり、世の名聞をすてゝ、 西行法師の墓は、西の方にやゝ高く、 似雲法師 かゝる

深山にこもりましける雨法師の天かける靈や、

かにおほすらむなご思ひつゝ伏をがむ、

嬉しくも世にあらはれつ茂りあふうはらか

きわけまうてし古塚

山を下り、座談の席にて住職は似雲法師に就て

場の講話 あり、 會員何某の君は、俳句にあら

よき座興なりき、 たのみ置ける車來つれば、ま

はれし西行といふ題にてをかしう話され

しは、

笠 置 及 W 瓶

は下午四時ごろなりき、

た花さくころにとちぎりて、かへり路につきし

むすひたて嬉しさ袖にあまりけり心ふかめ

し弘川の水

仲 原

田 應

弘

かつたと、新道から笠置寺の石段に掛つた

がよ

時 つくづく思ふ。

れた墨の濃さが、 寺の入口 には、 汗あんた私等の元氣を甦生せ 懐德堂堂友會講演場と大書さ

置名所を巡る。 しばらく涼をこつて、中村先生の御案内で笠

彌勒石なごを仰いで、虚空藏石の前に出る。虛

古の情を亂して了ふ。

てか、

美しい娘さんらの板についた客引は、

懐

時十分、

笠置驛を降りると、土産店が

軒 を連

ね

木

津から中村先生の他に二三氏が加つた。九

てられて、スポーツご云ふよりも投機心を睃る。

回五銭である。

栗の花匂ふ傾斜の道には、兎投の輪が所々に立

しめる。

斯 ふ好く晴 れるんだったら、 洋傘を忘れた方

笠

置

及

U 瓶

原

季房、

源具行、

千種忠顯等

の腹臣を具して笠置落ちをされ

72

笠 置 及 ZN 瓶 原

空藏菩薩の坐像の筋彫で、諭倉末期の作、 弘法 法親王、藤原藤房、

でも大きな室にはいらぬさうだ。

此の拓本をさる爲、千二三百圓を掛け、

顔だけ

大師の作とは只傳說に過ぎない。京都大學では、

此の あた þ 社寺の巨大な礎石らし いものが

有 うて、 **皆時** 盛 んであつた山の様が想像せら

胎 内潜りは、大岩が自然に重り合つたらしく、 n

30

末梢的な好奇心は起らなくなつてゐた。 同行の少年達は、胎内の涼しさを云ふけれごも、

方の士氣を煽揚したが、夜宇に至つて意外の足 から焼討の火の手が 元弘元年九月二十七日、北條氏が笠置總攻撃 足助重範、 僧本性坊なごの强弓大力が味 上つた。

> は隱れがもなし さしてゆく笠置の山を出でしより天が下に

の唱和は、其の後に出來たものと傳へらる、 į, ぬらす松の下つゆ かにせむたのむ陰さてたちよればなほ袖

たのは、麓の飛鳥路村の人が、 拔け路を北條氏 難攻不落であつた笠置も、

斯ら一

朝にして落ち

は、裏切者として、 に教へた爲であつた。 現今もなほ、 其の爲、 飛鳥路村 隣村 か b Ö 異端 人

者視し、爪彈きされてゐるさうだ。

行在所趾と云つても、礎石も瓦の破片も見當

らぬ處を見るさ、 假屋か、 寺の一 部か カジ 置 かれ

たものであらう。 軍 事上、 此 處 行 宮を置 か n

敵の目印となり易いので、 下の寺あたり

悲憤遣る方なくおはした後醍醐天皇は、 尊澄 ては、

から 本當の行宮であつたらうか。

青松の中に、 搖ぎ石 n る。 の邊に出ると、 笠置温泉の家々が白く光つて瞰下 木津川の清冽に沿うた

z

る 0) 石を押して と動いたが、 中 村先生は學生相撲の樣にしきつて、 あられ その 功 るど動く 德よりも、 動 **** 掌の痛みの方 私も 五尺大 あ Ŕ か

粉河、

志賀、

さある。

カゞ

ひごく長か

つた。

þ, < の鐘は宋風 Ħ 岩間を攀ぢつ 解 本ばなれのしたものだ。 脱上人の時に鑄造されたものだと傳 で 下が六つに切れ)解 脫 鐘 の前 建久七年の銘 に歸 7 か うて すば 來 る 。 があ らし

演 が 小 始められ 憩後、 中村先生から笠置山について、 3 御 講

12

て

ある。

此 Ø 쭛. Ш は自 置 及 U. 鳳 瓶 华 間 原 に開かれたもので、 御影石

> した様は、登攀の難澁さを思はしめ、白 が累々として轉がつてゐる。 んだつた修驗道の道場さして好適の地であ 巨岩の處 鳳 々に突出 年 ó 間 72 盛

大師の御すみか 十八段に、 平安朝にも有名だつたらしく、 寺は霊阪、 なるが 笠置, あは れなるなり、 法 輪。 枕草子、 高 野 石 は 百六 河 弘法

れ鎌倉の末には 平安朝の末、 解脫 安元二年に後白河 Ŀ 人が 、大伽藍を建てられ、 法 皇が 臨 御さ

笠置山の中興となつたので ある。

熾んになつた。 解脱上人も彌勒を信じたので、

て彌勒を信仰する者が

救は になり、

n

ると

Ļ 迦 0

المر

心思想が

永承七

年 から

鬪

爭

の世

釋

1音

が

Æ

ŧ 彼の巨大な彌勒 知 n n 石像が造られる樣になつたのか

後醍醐天皇が、 南柯の夢を見られたのは此 あ

二四四

桑の實が酸味も多く、厭な匂ひのないのを賞美

原

であ るが、 は 個の 物語に

過ぎず、

歷史上

Щ

何ら Ó 根據も無いここであ 30

最新の宋風の學問をして、 太平記の處々に天狗の出て來るのは、 葛城、 金剛、 吉野の 正成が

に見立てたのであらう。 修驗道の人々と共に動いた故で、 修驗者を天狗

太平記の著者は、 南朝に好意を持つてゐ、 楠

公の戦 略を誇張 L 理想化して、 神樣のやうに

後醍醐帝を繞る御話をして下さつた。 書立てたので ある。 等々、 二十分餘に渡つて、

晝食後、 汽車で加茂へ、一時十分だ。

婦人達のバラソルの日が反射してまばゆい。

拭き、 質を食べては、 先生達はタクシーで、 瓶原の内藤先生方へ、 丸い葉のより、葉の切れた方の 私らは徒走で汗を拭き 私は、 道端の桑の

> 話しかけたりして山莊へ着いた。 したり、 桑の枝を拾ひ束ねてゐる朴吶な老爺に

お茶を吹き吹き戴いてゐる人や、一面に陳列さ た漢書に、 恍惚さしてゐられる人々だ。

庭の柔かい感觸の芝を踏んで、座敷へ通ると、

n

椽先の篁を渡る風は、しばらくにして止 んで、

また元の蒸熱さだ。

拜月亭傳記の口繪は、

珍しく

確かな山水八物

だ、南畵家の友に見せてやつたらと惜しまれる。

床脇に支那の床が置かれ、 内藤先生は、質問に諄々ごお教へ下さる。 其の臺は、支那 0

は人家の樣に作られてゐた樣が解るのである。 古墳から出た波紋のある瓦燒の柱で、支那の墓

二千年前のものやさうだo

内藤先生は、 解脱上人について五十分ばかり

氏の 御話 カメラに入られた、時に二時四十分である。 下さる、 椽先で、 お世僻のうまい 111 本楢信

で一同 海住山寺へは は黄色い息を吐いてゐる。 凸川路を四十五分餘も登つたの 石に 腰掛 H 75

かず ら瓶の苔臭い水を分けられ 住 職 が 國寳の五重塔を、 心よく開扉 て汗を拭 ል して臭

破片

が散らばつて

ある[°]

参考品は、

近く

·の小學

れた。

の中 心柱が初重まで來てゐるが、此の塔は、二重の 此 の塔は鎌倉の初め、建保二年の創立で、當山 興、解脫上人の追福の爲の由だ。普通の塔は 處

先が長く の唐草は、 文 珠堂は鎌倉末 t 世尊寺の鐘の唐草と似 鎌 倉 のものらしい。 時 代の 特長を發揮してゐる。 てあ、 唐草の で止つてゐて、初重は、御廚子になつてゐ

30

中

を寄附したのである。

られぬに氣附く。 下山する様になつて、吉田先生他、婦人達のる 途中から引返されたらし

趾に至る。 御靈神社の朱い本殿を拜して、 大極殿は後に國分寺に寄附された 恭仁宮大極殿 b

ので たらしい礎石 ある。 此 なり、 足處は五 布目瓦 重塔の址らしく、 の焼けて赭くなつ 組 合さ 72 n

校に藏されて 中村先生は恭仁宮について御説明下さ ゐるさうだo

つた爲、平城へ遷都さなつて、國分寺に大極殿 橋諸兄の勢力は、 此の宮を支へるに至らなか

られなが 內 藤先生の書庫 Ġ もど來た Y 遙かに 大橋 中村先生か E か > 3 B をし

泉川の水は清ら かに、 鮎の 水中に跳ねるのが

笠

置

及

び

瓶

原

五五

一二六

日に光るの 川上 か らの風の涼しさに、汗が入つ

て了ふ。川端の木ささぎは白い花を盛 上げてゐ

た。梓だと云ふ。泉川なり梓は、萬葉集には多

く詠まれてゐて親しみ深いものである。

來し方を見放けては、 瓶原、 恭仁京を讃へた

萬葉の影を浮べつゝ、 加茂驛へ歩を進めた。

懷 德 堂 記

行し、終つて京大總長理學博士新城新藏先生の ▲記念祭典 昭和七年十月八日記念祭恒典を執

託す。

▲阪倉篤太郎氏

四月一日より林講師の後任さ

『陰陽五行説と現代の科學』(本號所載)と題す

る記念講演

堂出迎 清浦奎吾伯 る聽講生の請を容れ、 十月二十六日伯爵 講堂に於て修養 清浦 奎吾氏

來

に關する

場の訓話あり。

本山 評議員 十二月三十日評議員本山彦 30 二氏

(大阪毎日新聞社長)逝去せら 林講師 十二月末日十三年間 國文の講義を擔

當されたる講師 ▲高木評議員 林 森太郎氏辭任せらる。

同八年一月二十三日評議員高木

利太氏逝去せらる。

▲大塚末雄氏

三月一日より元熱田中學校長、

龍谷大學講師文學士大塚末雄氏に常任 講師を囑

師を囑託す。 して第三高等學校教授文學士阪倉篤太郎氏に講

成瀨文學博 士 四 月 十四 H より 京大文學

部敎

授文學博士成瀨 樋口評議員 八月二十二日評議員樋口三郎兵 清 氏 に文科講 義講 βıþ を孎託